



米一粒の教え

前橋市立第一中学校 1年 長井 優音

「まだお茶碗にご飯粒が残っているよ。ちゃんときれいに食べなさい。」

小学生の頃、父に言われたことがありました。少し位いいじゃないか、面倒くさいなと思いつつ、そういえば亡くなった祖父にも同じことを言われたなあと思い出しました。父も祖父もなぜしきりにご飯をきれいに食べなさいと言うのか、気になった私は母に聞いてみました。

母も子供の頃、母の祖母からお米の大切さを教えてもらったと話してくれました。

「お米一粒には七人の神様がいるんだよ。だからお米は残さずに大切に食べなさい。」

何度も言われた祖母からの言葉を今でも鮮明に覚えているそうです。神様という言葉に私は興味をわいて、母に聞いたり自分で調べてみたりしました。

七人の神様とは太陽、雲、風、水、土、虫、人の七つであり、お米を作る過程において必要な自然の恵みのことなのだと知りました。

まず、太陽光とそれによってもたらされる暑さは稲の成長に欠かせません。そして雲がその太陽光をほどよく遮り、直射日光からお米のひび割れを防ぎます。また稲の花は風媒花と言われ、雄しべの花粉が昆虫に頼らずに風の力だけで運ばれて受粉をします。豊富な水と栄養分の豊かな土は、稲が元気に育つ水田を作るための重要な要素です。虫はお米に危害を加える虫を食べてくれる益虫のことです。そして最後の神様は作り手です。米という漢字がお米を作るまでに八十八の手間ひまがかかることが語源になっているように農家の方は天候や田んぼの状態、稲の健康に常に気を配り、稲によりそって世話をします。手間を惜しまない、人間にしかできない育みなのです。作り手と自然、様々な神様の助けを得て、稲には初めて実りがもたらされます。

このことを知ってから普段何気なく食べていたお米が奇跡の食べ物のように感じられました。何か一つが欠けても手にすることができない天からの恵み。それを雑に食べ、残していた自分が恥ずかしく情けなくなりました。

お米を大切にしなければいけない理由はそれだけではありません。食べたくても食べられない人が世の中にはたくさんいるのです。母の祖母、つまり私のひいおばあちゃんは戦争を体験しています。戦争で食料が不足していた時代はお米が食べられない代わりに芋のつるや豆などを主食にしていたと母は聞いたそうです。そして現代でも貧困が理由で満足に食事ができない人がいます。先進国である日本でさえ、人口の六人に一人は貧困状態にあると言われていています。父も昔一人暮らしをしていた頃、お金を節約していて満足に食べられなかった時があったそうです。その時の経験からお米一粒でも決して残さないようにし、今食事ができることのありがたさを強く感じると話してくれました。

色々な人の話を聞いて、それ以来お米をかむ度に食べられることの幸せを感じるようになりました。お米はかめばかむほど甘く、いつも私のパワーの源です。朝ごはんを食べるおにぎりは一日の始まりに私の脳と体を目覚めさせてくれます。給食のご飯は午後の勉強や部活動の大切なエネルギーになります。家族で囲む夕食のご飯はいつも温かく、一日の疲れをいやしてくれます。お米は私の生活の中に当たり前であり、しかし当たり前には食べられないものなのだと気づきました。「いただきます。」いつも食事の時に言うこの言葉は、食べ物大切な命を頂くという意味です。今回の作文を書いて、自然の恵みや作物を育てる人に感謝する気持ちが一層強くなりました。頂いた命を一粒も無駄にすることがないように感謝の気持ちを忘れずに過ごしていきたいです。そして父や母が私に教えてくれたように、同じことを将来自分の子供に胸を張って伝えたいと思います。